

平成 29 年 7 月 17 日

「海の日」を迎えて

一般社団法人 日本船主協会
会 長 武藤 光一

平成 29 年の「海の日」を迎えるにあたり、ひと言ご挨拶申し上げます。

四面を海に囲まれた島国・日本は、衣食住の面で欠くことのできない多くの原材料やエネルギー資源を海外からの輸入に依存しており、そのほとんどは船によって運ばれています。輸出入量の 99%以上は海上輸送であり、国内においても、産業基礎物資の約 80%を海運が担っています。ゆえに海運は「インフラのインフラ」とも呼ばれ、生産・流通の各過程に深く関わり、サプライチェーンの中核を担っております。そのため、海運業なくしてはわれわれの生活や産業活動は成り立たず、かつわが国が海洋国家として繁栄していくことはできないと言っても過言ではありません。

しかしながら、これまで多くの国民の皆様が海運に直接接する機会はほとんどなく、また、学校教育の現場においてもほとんど取り上げられておりませんでした。このため、これまでも各地域・教育委員会をはじめ、関係各方面にあらゆる機会を通じて働きかけてまいりましたが、教科書でほとんど触れられていない中では、なかなか時間を取っていただけないという実情でした。

こうした状況下、学校教育においては、教科書や実際に授業で扱う内容のベースとなる小・中学校の学習指導要領が改訂され、海運の重要性への展開につながる文言が盛り込まれるとともに、更には先頃公表された同要領解説には「海運」「海上輸送」という文言を用いた記述が加えられました。

これは海運業界にとって画期的な出来事であり、子供たちの日本海運に対する理解増進につながる道筋が漸く見えてきたと言えます。私自身、幼い頃、社会科の教科書に造船業に関する記述があり、日本は造船国だという意識が今も刷り込まれております。ゆえに、子供のうちに教育を通して意識を定着させることは非常に有効だと実感しております。

これを契機に授業に活かせる資料や見学機会等の提供を通じて、学校教育の現場で海運への理解が深まるよう一層働きかけてまいります。

また、一般広報に関しても、「海の日」を中心に、政府や日本財団が中心となり推進している「海と日本プロジェクト」などに積極的に協力し、会員会社や他の海事団体、地方自治体等とも連携して、子供たちを主な対象とした商船の見学会を開催するなど、船を身近に感じていただくイベントを「船ってサイコ〜」と題して展開しております。「海の日」をきっかけに少しでも国民の皆様が海運の重要性が深く認識されるよう、継続的に取り組んでまいります。

「海の日」は、海の恩恵に感謝する日として、21年前の平成8年から国民の祝日とされました。資源の少ないわが国が経済大国として繁栄してきたのは、海を活用する海運がしっかりとその基礎を支える環境にあったからと言えるでしょう。そのため、「海の恩恵に感謝するとともに、海洋国家日本の繁栄を願う」という、「海の日」本来の意義を思い起こしていただけるよう、制定時の7月20日に固定化されることを願っています。

最後に、海を活動の場としている海運業界として改めて安全運航と環境保全を誓い、海洋国家日本の繁栄および関係者の皆様のご健勝とご発展を心より祈念しまして「海の日」の挨拶とさせていただきます。

以上